

『アンティゴネー』
—対立構造と人物の関係性が生み出す悲劇的効果—

人文学科（2部）言語文化・思想領域
田中聖子

本論文は、人文学科（第2部）に在籍していた田中聖子さんの2008年度卒業論文の要約抜粋である。2部人文学科には所属コースというシステムが存在せず、それぞれの領域において学生が自己の卒論テーマに即して指導教員を決定する。ギリシア悲劇『アンティゴネー』というテーマの関係上、私が田中さんの卒論指導に携わった。表現文化の卒業論文ではないが、演劇という共通のテーマを取り扱った優秀論文としてここに掲載したい。

『アンティゴネー』は、同じくソポクレスの手になる『オイディプス』とならんでギリシア悲劇を代表するのみならず、ヨーロッパ演劇史・思想史上きわめて重要な位置を占める作品である。この戯曲では、男と女、老年と青年、法と正義、公と個人、生者と死者といった根源的な価値基準をめぐって、アンティゴネーとクレオンという二人の主要人物がそれぞれの主張・世界観をになって、対決する。『アンティゴネー』に取り組むことは、ヘーゲルからジュディス・バトラーにまでいたる、ヨーロッパ思想史上の巨人たちと対峙することでもある。

田中さんは、「なぜアンティゴネーは最初からこれほど、死にたがっているのだろうか、孤立を自ら求めるのか」という疑問から出発し、先行研究と格闘しつつ戯曲を詳細に分析し、ギリシア悲劇の主人公としてのアンティゴネー像を浮かび上がらせることに成功した。自己の感性に忠実である一方で、文献等による検証を怠らない姿勢は論文執筆の王道を行くものであり、特に昼間フルタイムの職につきながら、これほどの大きいテーマに挑み成果を出した田中さんの努力に敬意を表したい。

なお、紙面の都合上、以下は論文全体のうち「第二章」「第三章」を縮約抜粋したものである。（三上雅子）

論文構成

はじめに

第一章 これまでの『アンティゴネー』論

第二章 作中における対立構造について

第三章 アンティゴネーの死と孤立、その英雄性

結論

はじめに

本論文はギリシア悲劇の黄金時代に活躍したソポクレスの作品『アンティゴネー』Antigoneを取り扱う。『アンティゴネー』は、テーバイ王家ラブダキダイにまつわる因縁話の一節を題材としている。オイディプス(Oedipus)の死後、その二子がテーバイの王位を争い、共に斃れる。その後王位を継いだクレオンは攻め寄せた敵方であるポリュネイケス(Polyneikes)の屍を葬ることを、死をもって禁じるが、その掟にオイディプスの娘であるアンティゴネーは、敢然として逆らって死刑に処せられる。そしてアンティゴネーの婚約者であるクレオンの息子ハイモン(Haimon)は、父と争い、自害を遂げ、その報せに王妃も縊れる。

古代アテナイにおいて、埋葬は非常に重要な位置を占める。その埋葬の決行により死に進むアンティゴネー(Antigone)と、国家の秩序の遵守により転落の運命をたどるクレオン(Kreon)、二人のそれぞれの主張が対立し合い、物語は展開していく。この作品は、ギリシア悲劇の代表作の一つとして『オイディプス王』Oedipus Tyrannosと並んで評価が高い作品であり、多くの研究者がアンティゴネー像、クレオン像などを分析し、作品についての論争を繰り広げてきた。

何世紀にも亘り、形を変えながらも『アンティゴネー』は人々を魅了し、演じ続けられている。それはなぜか。本論文では、物語の軸となるアンティゴネーとクレオンの対立を中心に作品についての分析を行うとともに、ア

ンティゴネーの纏う「死への希求」と彼女の「孤立」に焦点をあて、その悲劇的効果を考察していく。

(以下論文中の第2章及び第3章の要約抜粋)

第二章 作中における対立構造について

第一節 『アンティゴネー』における男性性と女性性について

『アンティゴネー』には様々な対立が含まれ、それが物語の軸を構成している。アンティゴネーとクレオンが中心となって物語が進んでいく中で、この対立構造は不可欠なものである。

クレオンとアンティゴネーは、男と女、初老と若者、公の必要と個人の信念、共同体の共存とエゴ、現世のポリス的生の要請と冥界からくる死の要請といったような対立関係にある。

しかし、この作品を分析するにあたって、二人の対立関係を見ることは必要条件であって十分条件ではない。アンティゴネーとその他の人物たちの関係性を見ることが同様に不可欠になるのである。よって、対立関係を軸にして、登場人物たちの関係性から作品分析を行いたい。

古代ギリシアは母系社会(女)から父系社会(男)へと大きく変わった時代である。クレオンは全てのポリス市民の代表者であり、それと対立して、それ以前の母系社会、神との繋がりを尊重した時代の代表者がアンティゴネーである。しかし、単純にクレオンが「男」、アンティゴネーが「女」とはっきりと区別してその対立関係が成り立ち、作品を構成しているわけではない。例えば、作中ではクレオンがアンティゴネーを「男」と呼ぶ箇所がある。

いやまったく私が男とはいえまい、この娘が男だろうよ (143)

たしかに、「言葉」という政治的な道具を使って己の行為の正当性を主張して信念を曲げようとはしないアンティゴネーは非常に男性的である。しかしクレオンは彼女を本当に男だと思っているわけではない。

私の息が止まらぬうちは、女の勝手にはさせぬぞ。 (145)

この言葉を含め、作中のあらゆるところで発せられるクレオンの言葉からは男の、女に対する侮蔑の感情を読み取ることができる。時の移り変わりから生じた男性優位の思想が彼の中には当然のこととして存在しているのである。

クレオンは当初、番人から埋葬をした者がいるという報告を受けたとき、「どんな男だ、そんな真似をやって退けた奴とは」(136)と言っている。つまりは望ましくないものではあるが、「そんな真似」をやったのける者は男に違いない、女などには到底できまいとクレオンは思っていたということである。では、クレオンにとっての「男」とは、「女」とはどういうものだったのだろうか。確かに、クレオンはアンティゴネーと比較したときに強い「男性性」で彼女の「女性性」を否定する。しかし、よくよく考えれば、劇中で彼が「男」と定義するものにあてはまる人物など実は存在していないのではないだろうか。

誰にもせよ、国の上下を統べるに際し、最善と見られる策を用いず、何かを恐れ、口を噤んですまそうというなら、私としては今も昔も渝(かわ)らずに、その男を無下に卑しい者と見なそう。 (134)

われわれも定(き)まった法規(のりおきて)を大切(だいじ)に守って、けして女わらべに牛耳を執らせなどしてはならないのだ。(149)

クレオンにとっての男とは、政治的な存在である。女子供が政治に関わ

ることをよしとしないのと同時に、国のために己が身を削ってでも役に立つことができる強さが男には求められる。そして彼の中で、ヒエラルキーの頂点に立つのは必ず男であり、その男に反抗できるのも当然男である。何かに反発し、物事に対して自らの意見を主張するというような政治的な行為は、クレオンにとっては男に求められるものであり男にしか許されないものである。ゆえに彼はアンティゴネーを男と呼ぶのである。

息子のハイモンも結局はクレオンにとっては「子」であったし、コロスは長老という形をとってはいるが「男」という存在ではない。番人や報せの男もクレオンが言うような「男」とは到底思えず、彼自身も結局はその一貫した態度のなさ、つまり自らの信念を突き通すことができない「強さ」の欠如から「男」の定義から外れてしまうのではないか。クレオンが言外に定義した「男」とは、彼自身がこうであるべきとした身勝手な理想であって、そのような人物は劇中には存在しない。一方で、クレオンの言う女性像は、イスメーネー (Ismene)、エウリュディケー (Eurydike) が体現している。

ここで、イスメーネーとアンティゴネーという二人の女性の関係から見られるその女性性について考察していく。

彼女達の関係がはっきりと分かるのは戯曲冒頭の会話のシーンである。

アンティゴネー　イスメーネー、大切な、本当の血をわけた妹の、あなたは、むろん知っているわね（・・・）何かあなたは聞き込んでいる。それとも、敵の者への禍いが、親しい身内へ及ぶのも、あなたは知らずにいるの。

イスメーネー　私には何の話もありません、（・・・）いっさいほかには存じませんもの。

アンティゴネー　よくわかってたわ、それであなたを中庭の門の外まで、呼び出したのです、他の人が聞かないように

(129)

アンティゴネーは、イスメーネーがポリュネイクスの遺体埋葬禁止令のことを「知らない」ことを「知っている」のである¹。しかし彼女は敢えてそのことを問うことで、イスメーネーの無知への苛立ちをあらわにし、テーバイ王家の血筋に連なるものとしての自覚のなさを責め立てている。一方、権力を恐れるイスメーネーは、女は男と争いあうように生まれついていない、国家に反抗する力はない、と言う。あくまで自分の主張を曲げないアンティゴネーの強い姿勢は男性的、そして争いへの恐怖、服従への諦めをあらわにするイスメーネーは女性的と言えるだろう。同性であるイスメーネーとアンティゴネーの間にもまた、女性同士でありながら男と女の対立関係が成立しているのである。そしてここで重要なのは彼女達の対比である。登場人物同士の掛け合いによって一ここでは女性的特徴の強いイスメーネーとの会話でその性格を対比させることにより一アンティゴネーの性格的特徴である男性的な一面を浮き彫りにする効果があるのではないだろうか。また、イスメーネーはアンティゴネー捕縛後の会話でこうも言う。

お願い、お姉さま、どうか私を見下げないで、いっしょに死なせて。
(145)

彼女は姉一人を死なせることに心を痛め、一人取り残されることへの不安や悲しみから共に逝くことを望む。これは一見心優しく女性らしいイスメーネーの性格を描いているようにも思える。しかし、イスメーネーが何も「主張しない」故にその存在はアンティゴネーの持つ強烈な印象には程遠く、観客に強い哀れみや共感を抱くに足らないものになっている。イスメーネーは『アンティゴネー』において必要な存在である。けれどそれはあくまでアンティゴネーを際立たせるための存在である。彼女の存在があることでアンティゴネーの「強さ」や「英雄性」という作用は大きく観客に働くのである²。

話を先ほどの問題に戻すと、クレオンが埋葬を男の仕業と決め付ける一方でコロスたちはこう言う。

王さま、私どもには、このお話の仕業というのは、どうやら神々のなされたことではあるまいかと、先刻からしきりに思われますが。(137)

このコロスの長老たちの台詞は、アンティゴネーがやってのけた埋葬行為が、まさか人間の仕業ではあるまい、神の仕業ではないかと疑っていることを示している。彼らにはその行為が人間、さらにクレオンと同様「人間の〈女〉」ではありえないと思わせるものがあったということである。この台詞においては、コロスはポリスの声的な役割を担っているが、「人間は埋葬されるべき」という一般的な通念に従うならば、その発令がクレオンという王によるものとはいえ、神に反しているということは明らかであり、コロスが代弁する市民の反感は少なからずあったことも示している。そして皮肉にも、のちに女神であるタンタロス (Tantalus) の娘であるニオベ (Niobe) に己を重ねて嘆くアンティゴネーを嘲るコロスたちは、ここで無意識にもその神性を感じ取っているのである。のちにハイモンとの会話で明らかになる点が、ここで暗示されていると言える。

スタイナーはアンティゴネーが劇の展開につれて変化し、このような男性的特徴から女性的特徴がだんだんと強調され、本質的な女性性を得ていくとしている³。

確かに、アンティゴネーは処女のまま死ぬ。それは性的本質、暗黙の存在目的を満たされぬまま死ぬということであり、「女」というものの本質的な部分に深く関与している。アンティゴネーは若くして死ぬのみならず、女だけが生むことのできる未来の多くの生命が絶たれることを悲しんでいるのだろう。

しかし、「生」とつながる女としての部分、「結婚」や「出産」について、アンティゴネーはそれらを得られぬ自らの運命を嘆くのであるが、同時に

彼女はそれに関係する「夫」や「子」を同じ口で否定する。

もし私が大勢の子の母親だっても、あるいは夫が死んで、その亡骸が崩れていこうと、国の人たちに逆らってまでこうした苦勞を引き受ける気は出さないでしょう。(157)

彼女は夫や子はまた「代り」を見つけられるが父母や兄弟はそうはいかない、という論理で自分の行為の正当性を主張する。このシーンの長い台詞のなかで、彼女は女として「生」への繋がりへの断絶を嘆き、同時に女ではなく、自らの信ずる法に則り言葉によって主張するという男性的特徴をもって「死者」との繋がりへの尊さを述べるのである。矛盾するように思えるこの彼女の言動は、彼女が男性性と女性性を揺れ動いていることを示しているのではないだろうか。

ギリシア悲劇においては、心理的考察を排除すべきであるという川島重成⁴の主張は誤ってはいない。しかし、これが単にトポスなのであれば、ここで「死」への親近感はある程度アンティゴネーの口から発せられなくてもよいのではないか。「生」への繋がりへの断絶を形ばかり嘆けば済むのである。しかし彼女は同時に本来属する死者の世界への親しみも灰めかすのである。ソポクレスは、アンティゴネーの揺れ動く「性」を、まるで矛盾するかのようなことを同時に彼女に述べさせることで表したのではないだろうか。そして女性性と男性性との間を行き来することは不安定にも思えるが、それによってアンティゴネーはただの単一的な人間という括りからは逃れ、その人物像に深みを与えられている。

また、アンティゴネーは結局間接的にはクレオンに殺されるが、直接的には自害によって命を落とす。アンティゴネーは「自らの信念を突き通すための選択的死」を重要視した。

アンティゴネー もっとひどいことをなさるつもりです、私を捕えて

殺す以上に。

クレオン 私の方は、それだけでいい。それだけやれば、万
事のかたがつくわけだ。

アンティゴネー そんなら、なぜぐずぐずなさるんです。

(143 - 144)

この台詞を一読すると、疑問に思える点が出てくる。彼女にとって「もっとひどいこと」とはなんなのだろうか。内山敬二郎訳では「わたしを捕えて、殺すよりももっとなにかお望みですか？／いや、それでよい。それだけすれば十分だ。／では、なぜ早くなさいませぬ？」(84頁)となっている。アンティゴネーの問いは「なぜ早くなさいませぬ？」へと持っていくための前置きなだけだろうか。しかしこの流れは、単にクレオンに早く死刑執行を促すだけのものではないように思う。「もっとひどいこと」という言葉には何か意図がある。それは関係ないイスメーネーを道連れにしてしまうことだろうか。しかし、アンティゴネーは自分の行為によって妹を巻き込み危険にさらすかもしれないというような危惧は一切持っていない。彼女が自分と妹を明確に分けて考えているのは明白である。故に自分とは関係のないことと割り切ってしまうのだろうか。それとも「あなたは生きる道を 私は死ぬほうを選んだのですもの」(146)という言葉どおりに、選んだ道筋とは反する結果となってしまうことへの苛立ちなのだろうか。しかしどの仮定も彼女の劇中の行動にはそぐわないように思える。彼女はその信念と同じように自身の行為に付随する死に対して誇りを持っている。それゆえにその信念に則って行ったものを、彼女にとっては「何もしていない口先だけの」イスメーネーと混同して殺されるのがたまらなく不快だったのだ。彼女にとってはこの死は行為に対する名誉の代償だったのだから。

当時、自己の主張を表現する手段が限られる男性優位の社会では、自由に死を選ぶということは、男たちの身勝手な主張や無神経さに対する女た

ちの無言の抵抗であったのだろう。自害には女性的な含みがもたれており、それはアンティゴネーのみならず、エウリュディケーの自殺によってより強められている。

このように、アンティゴネーの性別は生物学上紛れもなく女であるが、単純に女の象徴として、同じく男の象徴としてのクレオンと対立しているのではなく、性質的な性別については様々な面を持っていることが、より彼女を英雄的な、通常の間人とは一線を画する存在へと印象付けているようである。

第二節 『アンティゴネー』における死と埋葬をめぐる法の問題について

この作品には老若男女、様々な年齢の人物が描かれている。

ギリシアの思想や芸術において、「死」は老人よりも若者の傍近くにいることが多い⁵。『アンティゴネー』における若者と老人の衝突はアンティゴネー・ハイモンと、クレオン・コロスによって表され、特にアンティゴネーの死は、その処女性とそれに結びつく若さによって、彼女の政治的・社会的反抗の、人々への衝撃を更に強めたのである。

また、アンティゴネーとクレオンがそれぞれ司る「家族の法（自然法）」と「共同体の法」の対立は、死と埋葬をめぐる問題に深く関わっており、そしてその問題は、彼女達二人の主張の正当性を量る上で重要なものを含んでいる。クレオンの「共同体の法」は歴史的起源が浅く、時々状況に左右されるものであると言わざるをえない。特にポリュネイケスの埋葬禁止令に関しては、クレオンの権力の基盤が脆弱な状態で為されたものである上に、一国の王としては愚かとも言える頑固さで、他者の意見を退けてしまう。一方「家族の法」は、根源的で非時間的なものであり、クレオンのそれと対極の立場にあるものである。そしてそれに基づいて死者が正しく埋葬されることを「普遍的」に主張する彼女はひどく高潔なものに思える。個人の主張から始まった死者の埋葬という問題を、一般論へと展開さ

せることで彼女の主張は、明らかにクレオンの主張よりも正当性を得ていくのである。そしてそこから繋がる彼女の「選択的な死」は、クレオンの主張や理解を超える次元のものであり、最終的に、彼らの主張は論点がすれ違ってしまっている。

そして、「選択的な死」へと進むアンティゴネーとは対照に、クレオンは望まぬ「運命的な孤立」へと進むのである。

第三章 アンティゴネーの死と孤立、その英雄性

第一節 アンティゴネーの悲劇か、クレオンの悲劇か

アンティゴネーを研究する上で、必ずと言っていいほど出てくる問題のひとつが、「この作品の主人公は誰か」という問題である。

これまで述べてきたアンティゴネーという女性の高い英雄性、主張の高尚さ、大胆さと、社会的な地位と権力のみを持つクレオンを比べると、「ギリシア悲劇」の主人公としてふさわしいのはアンティゴネーであるということは明白である。クレオンには「死」への覚悟が欠如している。ポリュネイクス（死者）の遺体放置からはじまる彼の政治には様々な「死」が付随していたが、それらはすべて与える側の「死」である。彼の、与えられる「死」は自分には無縁だという思い込み、これはアンティゴネーの死への親近感と非常に対照的である。

また、埋葬の問題から、王位を奪われることへの危機感へと繋げて不安を募らせるクレオンは、国家と家族との対立であった問題を個人のそれに帰結させてしまっていることに気づいていない。更に、ソポクレスの描く「権力者」における共通構造の例に漏れず、彼は最後の自らの破滅に至るまで神々との折り合いをつけ切れていない。初めの強固な態度から段々と地盤を崩され、最後には全てを失った孤独の中で、それでも生きて政治をしていかねばならないその姿は、見る者に哀れみを抱かせる実に人間らしいものである。

しかし、人間らしい英雄はおらず、それは即ち彼がギリシア悲劇の主人公たりえないことを示している。

一方アンティゴネーは結果的には死したとしても、彼女の主張は完遂され、兄の埋葬と自らの苦難からの解放を成就している。彼女の高潔なその姿はギリシア悲劇の主人公として十分なものである。

第二節 アンティゴネーと死

『アンティゴネー』という作品、そしてアンティゴネーには初めから最後まで「死」の匂いが蔓延している⁶。ポリュネイケスの死、クレオンによる禁令破りに対する死罪、登場人物たちの連鎖的な死。ただ一人生き残ったクレオンにしても、最後は精神的には死して、しかし肉体的にのみは生の継続を強いられているように思われる。

アンティゴネーの死への強い願望については、先行研究において必ずと言っていいほど言及される。作品を一読して読者がまず感じるのは彼女の死への強い親近感である。

イスメーネー、大切な、本当の血を分けた妹の、あなたは、むろん知っているわね、お父様オイディプスから伝わったいろんな不幸で、生き残った私たちに、ゼウスがまだ掛けていないものが、いったいあるか。何一つ、苦しいこと、破滅のたね、蔑みや辱しめで、あなたや私の身の上に現在ないのは、一つもないのに。 (129)

それで死ぬのなら、本望ですわ。 (131)

冒頭から彼女は己の身の上を呪い、「死」という言葉を口にし、それを歓迎するかなのような体である。また彼女は、自分はまだ死んでいるという。

しっかりしてよ、あなたは生きていくんだし、私の命は、もうとっくに棄てちまってあるんだから
(560)

「あなたは」生きている、「私」の命は「とっくに」棄てている—アンティゴネーは妹であるイスメーネーと自分とに、はっきりと「生」の世界に属するものと「死」の世界に属するものとの線引きをしている。そして、彼女が「死んだ」のはつい最近ではない、もっと前からなのだということがこの台詞には表れている⁷。

作中において、アンティゴネーはクレオンによって死に追いやられるが、実際に彼女の死への親近感の要因がクレオンであるとは言い難い。アンティゴネーの死への願望はクレオンの禁令以前からのものであり、先の台詞のように、オイディプスの罪に由来する苦難の人生によってすでに彼女の中に存在していたのである。そして彼女は自身で「死」を選びとる。

寿命の尽きる前に死ぬこと、それさえ私にとっては得だと思えますわ。
(142)

以上のことと、彼女の死への願望の強さについては川島、丹下和彦が同様に述べているが⁸、死を望む態度の一貫性については意見を分かち。丹下は、アンティゴネーの死への願望を「川島が言うほどにアンティゴネーにあって最初から最後まで絶対体かつ確固不変のものだろうか」と疑問視する⁹。一方川島は、アンティゴネーは自己の死の定めを嘆いているのではなく、その習俗に基づく常套的表現（トポス）に依拠しているとしている¹⁰。

しかし、これらの論は極論ではないだろうか。アンティゴネーを、劇中にない心理状態を推測することで行動への理由付けをすることは、ギリシア悲劇というこの作品を読む上では余計なものと言わざるをえないし、かといって、単なるトポスだとその行動を割り切って考えすぎるとソポクレ

スの描く人物達に血が通わないような印象を受ける。

「それで死ぬのなら本望」と強い口調で告げる彼女は、一見感情を昂ぶらせた勢いでその言葉を口走っているようにも思えるが、彼女はこうも言う。

ええ、もちろん、力がないとわかったら、止めようけど。 (132)

この台詞は、ここまで強く埋葬行為を主張し、協力を拒否する妹を突き放すほどの強い姿勢をとってきた彼女とは打って変わって覇気の欠けるもののように思える。

そもそも、彼女の言う「力」とはなんなのだろうか。

アンティゴネーはイスメーネーにまず助力を求める。それは当然の義務として要求することとともに、彼女一人ではおそらくポリュネイクスを正しく埋葬する物理的な力がなかったからである。ただ、この台詞の中に出てくる「力」が物理的な力を指すとは思えない。実際彼女は略式ながらも一人で埋葬を行ったのである。丹下はこれをアンティゴネーの死への躊躇と見るが¹¹、彼女はその後に「立派な死っていう以上の酷い目に私はあいますまいからね」(132)と言う。彼女はすでに「死」という結末を念頭において埋葬行為に臨もうとしているのである。よってこの台詞から、アンティゴネーがこの埋葬行為を踏みとどまるかもしれないという可能性を見出すのは難しい。我々観客はアンティゴネーがこの後に埋葬を行うことを知っている。その上でこの台詞があることにより、彼女のあくまでも挑戦的で、我意を曲げることはしないという特徴を更に際立たせているように思える。そしてそういった彼女の性格が、この台詞に限らずイスメーネーとの会話の端々に現れているからこそ、彼女の埋葬行為と死への歩みはいっそう確信的になるのである。

悲劇における最終地点は「死」であるが、それは多くが運命によって望まぬ形で与えられるものであり、自ら進んで選び取る選択的死はアンティ

ゴネーに異彩を付与している原因のひとつであると言える。そしてその死への、死者への積極的とも言えるアプローチはアンティゴネーの愛、否むしろ私は恋の感情に近いのではないかと考える。

アンティゴネーは物語が進むにつれて、死の側へと踏み込んでいく。川島はアンティゴネーのその歩み寄りを「死を内包する愛」¹²と名づけてその理由付けを行う。それは神の法がもたらす死者に対する愛であり、死罪へと進む愛である。川島の主張からはその「死の愛」を体現するに相応しい謂わば神格化されたような高潔さを持つのだという印象を受ける¹³。しかし、ソポクレスが描きたかったのは、人間の女ではあるが神の領域に近づきすぎて生とも死とも交じり合えない、そんなアンティゴネーであるように私は思う。

アンティゴネーが愛を寄せるものに「生」の側であるものはいない。亡き父と母、そして兄。許婚であるハイモンとは劇中に顔をあわせたり言葉を交わしたりすることはない。また二人が寄り添うのは婚礼の間ではなく、墓代わりの洞窟である。そしてそのときにはアンティゴネーは自ら死の世界へと旅立ち、ハイモンはそれを追って、誤解を恐れぬ物言いをするのであればアンティゴネーに愛されるため、自らの愛を貫くために「死」の側の人間になるのである。アンティゴネーはハイモンに恋をしていたのだろうか。アンティゴネー自身の口からハイモンへの愛を告げる言葉は発せられない。彼女が熱烈に求め言葉にしているのは死への願望である。確かに彼女には家族への愛を持ち、死はそれに付随するものである。しかしそれとは別に、彼女は同時に呪われた血筋からの解放を求める死への願望を持っているのである。彼女は死に恋をしている。呪われた出自による苦悩から救い出して安らぎを与えられる死への恋とすることによって、彼女は単なる神格化されたヒロインではなく一人の女性としてその人間性を表現することができているように思える。

哀歌の中での彼女は死することへの嘆きと、婚礼への未練を切々と語っている。生を求め、死を嘆く「弱い」彼女も、信念を突き通し続ける「強い」

彼女も、どちらも確かに同じアンティゴネーである。それは共にあることによって、逆らえば死ぬ、しかしそれでも私は神の法を全うするのだという神への接近に対する自負を強くあらわし、そこまですることによって他者に与える衝撃の大きさ、インパクトがあったのではないかと思う。死と、生への未練は背中合わせで存在している。対照的なその二つが互いに接近していることによってより二つのコントラストがはっきりとし、更にどちらもが一人の人間に包含されることによってその人物に深い人間性を与えているのではないだろうか。アンティゴネーが生への未練を語り、また「死」を希求することによって、その劇的効果は作品へと還元されている。

第三節 アンティゴネーの孤立

アンティゴネーはなぜ孤立するのか。誰もが作品に感じるのは彼女の死への親近感と孤立への積極性である。それは作者であるソポクレスにしか分からない問題であるかもしれない。あえてその間に答えを出すのなら、その答えはこれが『アンティゴネー』というギリシア悲劇作品であり、彼女が持つギリシア悲劇の主人公としての特性に求められるのではないか。

アンティゴネーは孤立から逃れる手段、機会を自らことごとく手放していく。

彼女と一番近い血縁者はイスメーネーである。しかし彼女は冒頭の時点で彼女との関係を断ち切ってしまっている。彼女は埋葬を拒否した妹を自分の「身内」ではなくクレオンの「身内」だとみなし、自分から切り離れた。そして劇中での彼女の孤立はこの冒頭のイスメーネーとの会話から始まると言えよう。

「身内」という言葉が劇中にはしばしば現れる。古代ギリシアの通念として、家族（身内）は埋葬に立ち会うべきという考えがある。以上のことが確かだとするとイスメーネーにはポリュネイケスの埋葬に立ち会う義務があるが、直系ではないクレオンやハイモンにはその必要がない。アンティ

ゴネーが婚約者であるハイモンに助けをはなから求めなかったのはこれが原因であると考えられる。

この作品においては、登場人物たちによる様々な対立が大きく捉えられているが、向かい合い、反発する対立に対して、しかし一方で常に一方通行の報われないそれぞれの思いが交錯しているように思える。アンティゴネーからは常に死者（ポリュネイケス、オイディプス、イオカステなど）への愛が、イスメーネーからアンティゴネーへの思慕が、ハイモンからアンティゴネーの恋どころが、クレオンからハイモンへの親子愛が、最終的には誰もが報われないような形で存在している。アンティゴネーは死後の世界でなんらかの愛の応答があると信じているようであるが、死者からアンティゴネーへの愛は劇中において目に見えては返ってはこない。当初アンティゴネーからの「要求」という働きかけがあったイスメーネーも、埋葬の拒否以降自ら共に死にたいと願うも逆に拒否され叶わない。ハイモンに至ってはアンティゴネーと婚約がなされているにも拘らず、劇中での接点が皆無である。生者ハイモンの愛は死者の領土に踏み込んだアンティゴネーには届かない。そしてクレオンはその頑なな態度と蒙昧さ故に、ハイモンを失うこととなる。これらの一方通行の報われない愛が、作品の中で複雑に絡み合い、人間関係により深みを与えているのではないだろうか。そして、それこそがこの作品を悲劇と成立せしめているのである。互いの相手への重いが成就しないことによって孤立へと進んでいく流れは、人間関係が上手く繋がることがないという悲劇の特徴である。結婚という人間関係の成就が喜劇の形であるとすればその反対である悲劇の形に非常によく沿う筋立てである。この作品は終盤に近づくにつれて、それぞれの登場人物たちが孤立していく。アンティゴネーの孤立から始まり、クレオンの孤立で終わる。それぞれがその孤立へと進んでいく中で、アンティゴネーのみが、自ら選択的に孤立へと進んでいくのである。だからこそこの作品は『アンティゴネー』なのである。

『アンティゴネー』の訳については、『ギリシア悲劇全集』呉茂一訳 第二巻、人文書院 1960年を用い、本文引用箇所のとくに頁数を示した。

【注】

- 1 川島重成『ギリシア悲劇 神々と人間、愛（エロース）と死（タナトス）』（講談社、1999年）179頁。
- 2 丹下和彦『女たちのロマネスク 古代ギリシアの劇場から』（東海大学出版会、2002年）5頁。
- 3 ジョージ・スタイナー、『アンティゴネーの変貌』海老根宏・山本史郎訳（みすず書房、1998年）335-336頁。
- 4 川島、204頁。
- 5 ロバート・ガーランド『古代ギリシア人と死』高木正朗・永都軍三・田中誠訳（晃洋書房、2008年）92-103頁。
- 6 丹下、『ギリシア悲劇 人間の深奥を見る』（中央公論新社、2008年）96頁。
- 7 前掲書、98頁。
- 8 前掲書、96-103頁、川島、214頁。
- 9 丹下、『ギリシア悲劇 人間の深奥を見る』、102頁。
- 10 川島、231-232頁。
- 11 丹下、『ギリシア悲劇研究序説』（東海大学出版会、1996年）36-37頁。
- 12 川島、185頁。
- 13 川島、190頁。